

# 金石範報告・発言録への補足説明

## Explanatory Notes to Kim's Lecture

平塚 毅  
HIRATSUKA Takeshi

「文化はいかに国境を超えるか——在日朝鮮人作家の視点から」は、1998年12月19日に開催された立教大学アメリカ研究所主催の公開シンポジウム「文化はいかに国境を超えるか——人種・民族・国籍をめぐって」における金石範氏の報告・発言を録音したテープを起こし、文字化した文章を極力そのまま残すように心掛けて構成したものです。論文調の文体等への修正も幾度となく検討しましたが、同氏の発言の迫力が少しでも伝わればと思いこのスタイルでの掲載を打診したところ、同氏が快く応じて下さいました。発言の採録を修正した原稿に同氏が加筆する作業においても、発言時の心の動きにより忠実な表現となるよう配慮をいただきました。句末や文末の表現、そして終助詞や文間から同氏の声の大きさ、話すスピードや、怒りの声、嘆きの表情、語りかけるやさしさ、無念の思いなどを想像しながらもう一度読み直してみして下さい。生きた声で文字を通して伝われば幸いです。(国名・名称等については、発言の通り掲載します。)

シンポジウムにおいて、金石範氏からは多くの発言をいただきました。基調報告での話が聴衆を刺激したのか、質疑応答では同氏への質問が大半を占めました。日頃自らの所在を意識していない人たちの「日本人」を意識した質問とそれへの応答の中で、同氏が「在日」として生きてきた歴史的な経験から、また、現在の視点から、さまざまな問題が提起されました。シンポジウムの後、加筆の作業の折に同氏にお会いする機会があり、最近の活動とともにシンポジウムでの発言を見直しました。そこで同氏が差し迫った問題として指摘したのは、「在日」としての国籍問題と民族教育です。本稿においても国籍観と民族観、さらにその根源

が何であるかは推し量れるものと思われます。その一部を振り返ってみます。

第一に、国籍問題について基調報告の中で、北朝鮮と日本が国交正常化した場合に、日本における「朝鮮」籍は自動的に「北」、朝鮮民主主義人民共和国籍に移るような、半強制的な政策を日本政府がとるであろうとの話があります。氏自らを例に挙げ、北朝鮮の国籍は取らない、韓国籍も日本籍も取らない場合に、「朝鮮」籍でありながら「北」の国籍を取らない存在が日本に生まれるであろうとのことです。この完全な無国籍状態を「新しいディアスポラ」と呼び、日本国内のエアポケットとして国際的に大きな問題を孕む深刻な事態と予測しています。言い換えるならば、「朝鮮」という記号が国籍にかわることで、つまり第二次世界大戦後の占領政策のひずみともいえる朝鮮半島が南北に分断されたままの歴史のある種の結末に対する危惧かもしれません。「在日」作家として、二重の言語の呪縛に置かれた自らの立場へと繋がるこの話は、「文化は国境を超える」というテーマに対する生きた言葉による提言であるといえましょう。

なお、同氏より今回の報告・発言録の掲載にあたって、『世界』第661号(1999年5月号)に掲載予定の「再び、「在日」にとっての「国籍」について 準統一国籍の制定を」を参照されたいとのことですが、こちらは作家李恢成氏との論争の最新の稿となるものです。争点はいくつもあるものと思われますが、報告・発言録における国籍観と民族観、そして「国民国家」が必要悪であるという発言を読み解くためのテキストとして重要なこの論争の経緯を明らかにするために、主要なものを本稿末の参考文献に加えました。

第二に、民族観について。アメリカ研究所主催のシンポジウムの約1ヵ月後、私の所属する立教大学文学研究科比較文明学研究室が「フォーラム比較文明学」を開催(株式会社アルク、ポーラ文化研究所と共催)しました。第1回「多文化状況の中の日本～共生的な社会はいかに可能となるか」(1999年1月18日、於銀座ラ・ポーラ)において、聴衆から「日本がとりわけ住みにくい環境にあるとは思えない。日本が住みにくいというのは、何か日本を悪くしようと思っているのではないか」との旨の発言がありました。これは、「日本が住みにくいところだ」という「在日」三世のパネリストの話に対するものです。今回のシンポジウムでも、報告・発言録内でまとめた質問の4番などには同様の問題が含まれていると思われます。「差別とかはああると思うが、在日の人がやたらに意識している

ところがあると思う」「歴史は歴史である程度認識して、個人的な問題を重視していたら国としてやっていけない」と要約した部分です。その場に居合わせた者の私見に過ぎませんが、こうした発言は悪気など全く感じられないもので、その意味ではフォーラムでの発言と同様です。

「在日」問題に限らず、ここで考えるべきことの一つは、なぜいつまでも差別される側・抑圧される側・他者たらしめられる側だけが生きにくさを感じ、忍苦を訴えなければならないのかということです。反対側の者から気づいて訴えることはありえないのでしょうか。すべての物事は経験によらなければ気づきの萌芽をも見出せないのでしょうか。同氏は言語の普遍性について述べたくだりの中で、朝鮮語を全く知らない少年が日本語でもって自分が朝鮮人であるという民族意識をもつという例を挙げています。また、歴史的な状況がその人間を朝鮮人を作っていくとも言っています。ならばそれらを手がかりに、居心地の良さを感じている人たちは、日本語で民族意識をもった少年や歴史的状況によって作られた人が実は身近にいるのではと心に留めてみるのです。つまり、気づかないこと自体が、抑圧の構造を認めることとなるのではと、住みにくい社会を、街を、町内会を構成しているのではないかと、疑ってみるのです。失業も、学級崩壊も、バリアフリー社会に届かないことも、ひとりひとり状況や程度に違いはあるにせよ、根源には同質の問題があり、そこに突き当たるのではないのでしょうか。私は差別や偏見をテーマとして地方都市に出入していますが、東京と地方都市の両方から見て一つだけはっきりと言えることは、「在日」に関して解決できないことは、いわゆる「外国人」問題にも解決できないことだということです。法制度や社会保障のみならず、意識の問題でもあります。まずは「在日」から解決せよと言っているわけではありません。先人の残した負の遺産の中に私たちが生きているということから目を背けつづけることはできないと訴えたいのです。

第三に、『火山島』という氏の作品が国境や制度をいかに突き抜けたか、突き抜けているかという点です。限られた時間の中でこの点にまで討議がゆかなかったことが悔やまれます。そこで私見を述べます。最近の韓国の国定韓国高等学校歴史教科書『韓国の歴史』（日本語訳）には「済州島四・三事件」が記載されています。「共産集団の南韓攪乱」と小見出しのついた記述の全文は1ページ中の約3分の2のスペースが割かれており、『火山島』とは相容れない

内容です。

**共産集団の南韓攪乱** 共産主義者は南韓の政情不安や脆弱な経済状態を利用して攪乱作戦を進めた。大韓民国政府の樹立を前後して彼らは、麗水・順天反乱事件などを引き起こした。

濟州島四・三事件とは、共産主義者が南韓の五・一〇総選挙を攪乱させるために引き起こした武装暴動であった。彼らは漢拏山を根拠地にして官公署を襲撃し、殺人、放火、略奪などほしきままに蛮行を働いた。しかし郡警の鎮圧作戦と住民の協力によって平穏と秩序が回復された。

麗水・順天反乱事件は新しく樹立された大韓民国を混乱させようとしたものであった。共産主義者は弾薬庫、兵器庫を破壊する一方、官公署、警察署を襲撃して警察官と民間人を虐殺した。しかし国軍の活用によってただちに鎮圧された。このような北韓共産主義者の攪乱作戦はその後も続けられた。(訳書 441 頁、ルビは訳文のまま)

1999 年現在の記述では、「濟州島四・三事件は共産主義者が南韓の五・一〇総選挙を攪乱させるために起こした武装暴動で、鎮圧過程で無辜な良民が多くの被害を被った」となり、少しニュアンスが変わってきたのかもしれませんが、確認のために私が 10 人くらいの日本や韓国に在住する 20 歳代前半から 30 歳代後半の「韓国人」に質問してみました。その答えは押し並べて「教科書に載っていてもいなくても、どちらにしても現代史は大学受験の範囲ではないから、高校の先生も教えない」とのことでした。教育の実践では無視された状況にあるかのような印象を受ける結果でした。記載が歴史的事実か否かという判断にいたる以前の、動き出したばかりの問題なのかもしれません。しかし、韓国の高校の国定教科書に、たとえ歴史認識に疑念のある記述だとしても「濟州島四・三事件」が載せられたその事実は大きいものと考えます(教科書に記載されたのは 1982 年からのようですが、「濟州島四・三事件」という名称ではなく、「濟州島暴動事件」となっています)。葬り去られていた過去から「濟州島四・三事件」と記されたことの意味を、金石範氏の作品との連綿たる繋がりを見つけていくことが今後の課題です。日本に立ち返るならば、「沖縄」や「アイヌ」への日本政府の態度やそれに対する研究課題と言い換えうるでしょう。

「在日」の学者たちによる学問的貢献という観点から、池明親氏の『チョゴリと鎧』での指摘は重要で、「在日」文学者のありようの一つを示しているの

はないかと感じられます。

戦後の在日の史学は、まず朝鮮における日帝時代を告発して、日本の歴史学にも影響を与えました。そのつぎには、古代史における論争ですが、文化が朝鮮を経て日本にきたということを徹底的に追求して、また日本史学に影響を与えたわけです。それは韓国内の史学にも影響を与えました。なぜならば、いままでの国内の朝鮮史学では、日本との関係がまったくなおざりにされていたからです。このようなことが、その座談会（筆者注、「《在日》を生きる——在日僑胞の現在と未来」）でも問題にされました。

日本の歴史学においてもそうですが、また、朝鮮の歴史学においても消去されたものを歴史の本流にもどすことが要求されています。さきほども説明しましたように、関東大震災における朝鮮人虐殺も消去されていますし、左翼にかんすることだといって、一九四八年の済州島事件も消去されているわけですから、そのように南で消去している歴史、また北で消去している歴史を積極的に発掘して、歴史の本流にもどすような仕事、これはたしかに祖国の将来の歴史学にも大きく貢献することになりましょう。（209-10 頁、段落ごとの字下げは原文のまま）

また、同書の中で、金石範氏の『火山島』については以下の通りに触れていません。

朝鮮史においても、また、現代的な意識で書かれた歴史においても、消去がいまも行われています。私は、金石範さんの『火山島』（文芸春秋）をひじょうに興味深く読みました。それを読んでうれしく思ったことは、戦後における韓国の作家たちが、戦後史のなかでの左翼と右翼のたたかい、そこには良心的な左派が多かったのですが、それを文学の世界から消去してしまったのに、金石範さんが、その空白を埋めるように、それを取りあげていることでした。そこに在日朝鮮人作家の意味、または使命があるともいえます。しかも、済州島では何万人もが殺されているのに、いままでだれもそれについては書けず、口にすることもできなかったのです。それはタブーでありました。それを作品の世界に選び出したことじたい、作品の題材からしてじつにすばらしく、たいへんなところみであると思います。（208 頁、ルビは原文のまま）

最後にもう一つ、誌面の都合上、特に「質疑応答」においては大幅に割愛せざるをえませんでしたので、その一部を簡単に紹介します。在日朝鮮人として日本の社会で生きる上での苦難・困難の体験についての話がありました。関東大震災時の朝鮮人に対する暴虐と、最近のテポドン騒動の時に近所の人の対応が変わったことやチマチョゴリ事件を結びつけた話がありました。戦後の GHQ による民族学校取壊については、学校の歴史教育で無視された存在だということに気づかされました。より身近な話題も取り入れたため、質疑が集中することとなったのか

もしれません。

最後になりますが、明治大学政治経済学部教授の小畑精和氏に感謝の辞を述べます。小畑氏には、基調報告にもある「日韓文学者交流シンポジウム」の資料を、発行前にもかかわらずご提供いただき、初回の構成段階における貴重なご意見をいただきました。心より御礼申し上げます。■

\* \* \*

## 参考文献

### I. 国籍観・民族観に関する論争の資料（発行順）

- 李恢成 「いきつもどりつ」『新潮』1997年1月号。  
金石範 「再びの韓国、再びの済州島 [一]」『世界』第660号（1997年2月号）。  
—— 「再びの韓国、再びの済州島 [二]」『世界』第661号（1997年4月号）。  
李恢成 「韓国国籍取得の記」『新潮』1998年7月号。  
金石範 「いま、「在日」にとって「国籍」とは何か 李恢成君への手紙」『世界』第653号（1998年10月号）。  
李恢成 「「無国籍者」の往く道 金石範氏への返答」『世界』第657号（1999年1月号）。  
金石範 「再び、「在日」にとっての「国籍」について 準統一国籍の制定を」『世界』第661号（1999年5月号）。

### II. その他

- 『韓国の歴史——国定韓国高等学校歴史教科書』[第五次教育課程（1987年）韓国国定教科書「国史（上）（下）」の日本語訳] 曹昌淳・宋連玉共訳。東京：明石書店、1997年。  
天野真美 「乱反射する「日本語」「在日朝鮮人文学」と「日本語」千年紀文学の会 編著『アジアのなかの日本文学』（千年紀文学叢書2）東京：皓星社、1998年。  
池明観 『チョゴリと鎧 その歴史と文化をとらえなおす視点』東京：太郎次郎社、1988年。  
ドイッチャー、アイザック 『非ユダヤ的ユダヤ人』（岩波新書）東京：岩波書店、1970年。  
金成禮 「韓国 近代への喪章 暴力と済州の記憶」『現代思想』1998年6月号。  
金時鐘 『「在日」のはざままで』東京：立風書房、1986年。  
金石範 「よみがえる「死者たちの声」 毎日新聞1998年3月31日。  
—— 「韓国民主化は実ったか」毎日新聞1998年9月9日。  
—— 「かくも難しき韓国行」『群像』1998年12月号。  
—— 『民族・ことば・文学』東京：創樹社、1976年。  
—— 『ことばの呪縛』東京：筑摩書房、1972年。  
李静和 『つぶやきの政治思想 求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められた

ものへの』東京：青土社, 1998年.

李恢成「状況と参加——新しい世紀にむかう韓国と日本の文学」『群像』1998年9月号.

円谷真護「荒野に立って神を呼ばず 金石範『火山島』について」千年紀文学の会編著『アジアのなかの日本文学』.

梁石日『アジア的身体』東京：青峰社, 1990年.